アイヌ民族文化研究センターだより NO.5 1996年9月30日発行

バラートシ・アイヌコレクション展
—ヨーロッパからの里帰り—

ハンガリーのバラートシ・バログ・ベネデク* Baráthosi Balogh Benedek (1870～1945) は、その生涯に4度、アジア極東地域への旅におもむきました。そして2000点を越す工芸品を収集したほか、当時の人々の生活習慣などを記録したノートや絵、写真などを残しています。

1914(大正3)年には、北海道・色丹島・サハリンでアイヌ民族資料の調査と収集をおこなっています。

これらバラートシによる収集品や記録は、単なる趣味的な収集にとどまらない、学術的に高い価値を持つものとして評価されています。

1911年トロイツカヤ近郊にて、右端がバラートシ

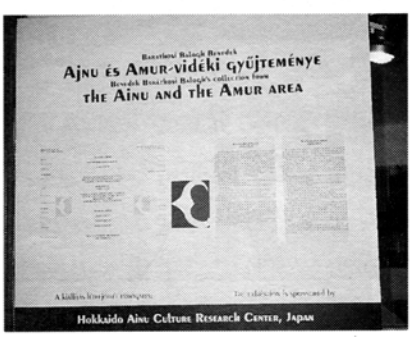
このたび当センターでは、ブダペストの国立民族学博物館が所蔵しているこれらのアイヌ関係資料を借り受け、調査研究をおこなうことになりました。あわせて、北海道開拓記念館・帯広百年記念館との共催のもと、下記の日程で展示を開催いたします。

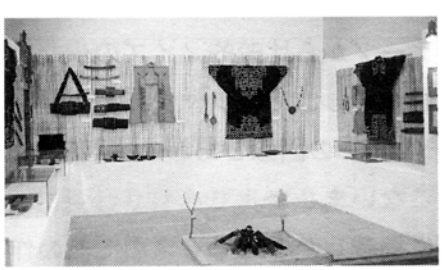
- 北海道開拓記念館（札幌市）
  1997年1月16日～2月9日
- 帯広百年記念館（帯広市）
  1997年3月予定

なお、これらに先立ちハンガリーでも、今年8月24日から10月2日まで、国立民族学博物館においてアイヌ関係資料のほかアムール地方の諸民族の民俗資料も含めた特別展 Benedek Baráthosi Balogh's collection from The Ainu and The Amur Area（ベネデク・バラートシ・バログ* によるアイヌ及びアムール流域のコレクション）が開催されています。

*ハンガリーでは人名は姓・ミドルネーム・名の順に言う習慣ですが、民族学博物館の英文パンフレットでは名・姓・ミドルネームの順に記されています。

ハンガリーでの特別展より（撮影：谷本）

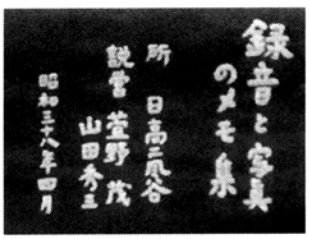




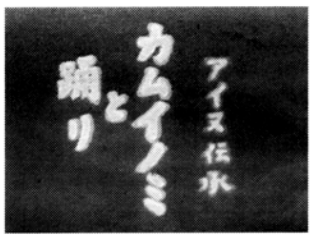
山田秀三文庫の整理作業 その3

昨年度刊行いたしました『山田秀三文庫図書資料目録』に続き、今年度は音声・映像資料の目録の刊行を予定しています。

「センターだより」第3号ですでにお知らせしましたように、映像資料（8ミリフィルム）にはアイヌ文化に関するものが一点あります。そしてそのフィルムには、山田秀三氏自身の筆になるタイトル(「アイヌ伝承　カムイノミと踊り」)や挿入文などのあることもご紹介したとおりです。



2



1

残念ながら元のフィルムの状態があまりよくなかったため、画面にしばしばノイズが走ります。そのため文章はなかなか読みとれません。また、ピントが少しずれて、手書きの文字がにじんだように映り、判読の難しい箇所もあります。

そこで整理作業の一環として、複写されたHi8(ハイエイト）ビデオテープから比較的ノイズの少ない部分を選んで静止画像にし、そのコマをビデオプリンターで印刷し、モニターの画像とあわせて判読し、新たに文字化をおこないました。

今回は、第3号に掲載した2コマも含めてその作業の一部をご紹介いたします。

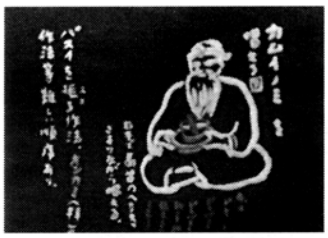
＊　＊　＊　＊　＊

- 冒頭の番号は登場するコマの順に付けた通し番号です。
- 「□」は判読できなかった文字一字分を示します。
- 「［　　］」は文字も字数も不明なものを示します。
- 改行は原文どおりですが、行頭は一律にそろえました。
- 旧漢字や異体字は当用漢字に改めましたが、送りがなは原文のとおりにしました。
- ルビや傍線は山田秀三氏自身によるものです。

＊　＊　＊　＊　＊

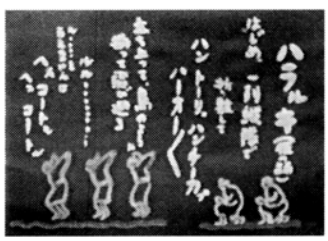
第3号p.1掲載　「カムイノミ」より

9
カムイノミを唱える図
□
ポキ□
□
□
□
□
右手で高□のへりを
さすりながら唱える。
パスイを振る作法、オンカミ（拝）□
作法等難しい順序あり。

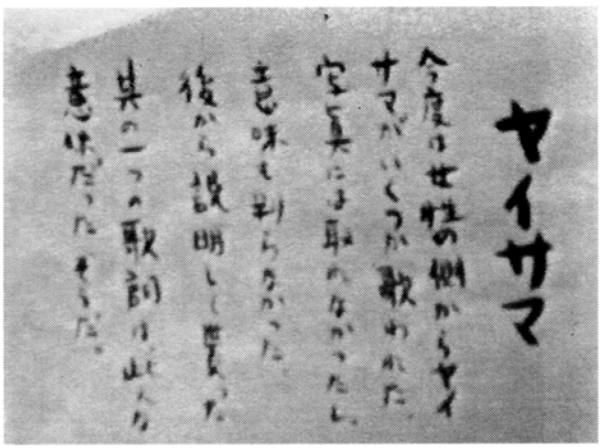


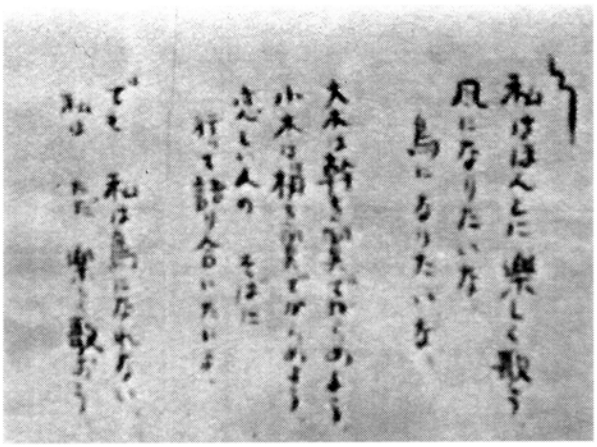
第3号p.1掲載　「ハラルキ」より

16
ハラルキ（雁の踊）
はじめ、一列縦隊で
折り□して
ハントーリ。ハンチーカプ
ハーオー〳〵
立ち上って、鳥のように
揃って飛び廻る
ルル……
ル……と
云えない人は
ヘスコートル
ヘスコートル



「ヤイサマ」より

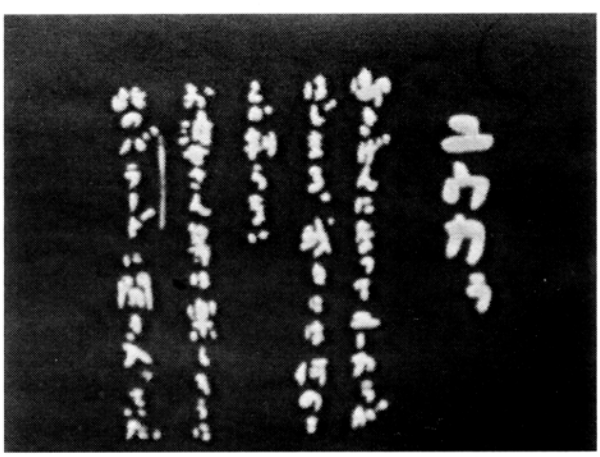




12
ヤイサマ
今度は女性の側からヤイ
サマがいくつか歌われた。
写真には取れなかったし、
意味も判らなかった。
後から説明して貰った
其の一つの歌詞は此んな
意味だったそうだ。

13
私はほんとに楽しく歌う
風になりたいな。
鳥になりたいな。
大木は幹を翼でからめよう。
小木は梢を翼でからめよう。
恋しい人の　そばに
行って語り合いたいよ。
でも　私は鳥になれない
私は　ただ　楽しく歌おう

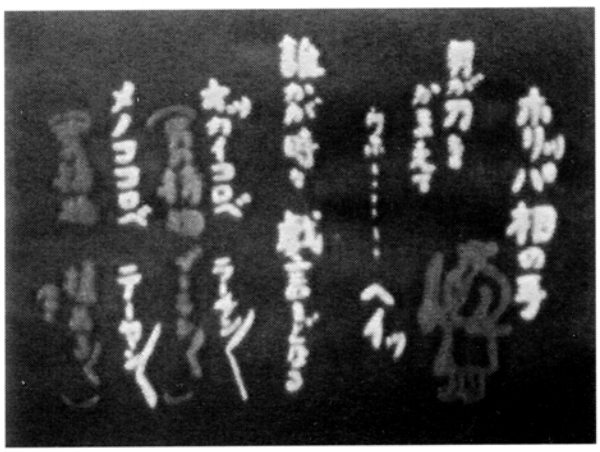
「ユウカラ」より



14
ユウカラ
御きげんになってユーカラが
はじまる。我々には何のこ
とか判らない
お婆さん等は楽しそうに
此のバラードに聞き入っていた。

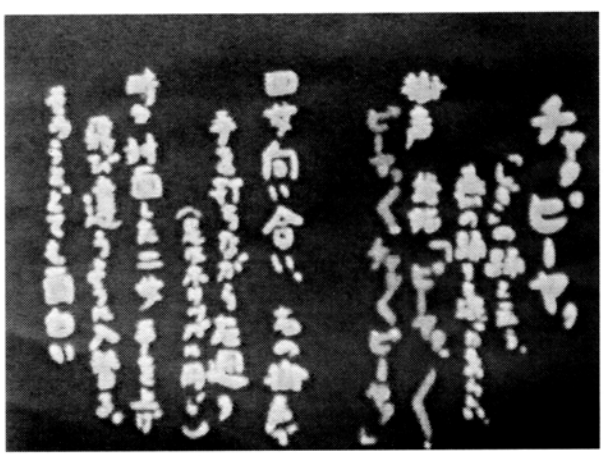
「ホリッパ」より

18 ホリッパ相の手
男が刀を
かまえて
ウホ……ヘイッ
誰かが時々戯言をどなる
オッカイコロベ　ラーチン　〈〈
（男の持物　ブーラン　〈〈）
メノココロベ　テーヤン　〈〈
（女の持物　□□ろ　〈〈）
？



「チャクピーヤク」より

19 チャクピーヤク
「しぎ」の踊りと云う。
燕の踊りと混ったものらしい。
掛声　終始「ピーヤク。〈〈。
ピーヤク〈〈。チャク〈〈ピーヤク」
四女向い合い、右の掛声で
手を打ちながら左廻り
（足はホリッパに同じ）
時々対面した二女　手を上げ
飛び違うように入替る。
そのうえ、とても面白い



＊　＊　＊　＊　＊

これらも含めて全体的に各コマの文は、解説というよりはむしろ山田秀三氏の耳にどう響きどう目に映ったか、という短い感想文のような趣です。

地名研究の著作に見られるような、不確かなことには慎重な姿勢を崩さない筆致とは異なり、時にはやや感傷的でもあります。また、現在の視点でこれらを読むと、もう少し細かな説明が必要とおもわれるものも見受けられます。

それにしても、1963（昭和38）年当時のアイヌの祈りや芸能の映像は数少なく、貴重な記録であることに変わりはありません。

また、氏がそのようなものを意図していたわけではないとしても、結果的に、単なる「メモ集」（第2コマの語）以上の、映像と文章とを組み合わせた随想表現になっているような統一感が、フィルム全体に流れているように感じられます。（甲地）

噂をすれば…

以前、「面接調査」により語彙調査をしていた時のことである。アイヌ語話者のおばさんから「悪口・陰口・噂」などの語について、その用例や使用法についての記録をとっていた。

聞き取りの最中にふとしたことからご近所の方の話題になった。しばらく聞き取りを続けていると、見晴らしのよいおばさんの家の居間から、先ほど噂をしたばかりの人がこちらに向かって歩いて来るのが見えた。

おばさんは、「アヤポ　エネワ、オルスペ　アイェアクル　エッコロ　アン。〝ayapo ene wa, oruspe a=ye a kur ek kor an.〟（あらら、噂をしたばかりの人がもうそこに来ている）」とその状況を言いあらわした。この表現はそのときのおばさんの表情や口調と共に実に生き生きとしていた。

日本語では「噂をすれば影がさす」と言ったりするが、「あー、やっぱりそういう事ってあるんですよね」などと私は感心しながらさらに聞き取り調査を続けた。しばらくして今度は電話の音がなりひびいた。電話に出るなりおばさんは、「あっ」と小さな声をあげて私を見た。会話が終わり、「やっぱりさっき言ったことは本当にあるんだよね」と笑った。調査を始める前に、おばさんはある人の消息を私にたずねた。久しく会っていないので元気でいるのだろうかと気にしている様子だった。電話の主はまさにその方だった。おばさんが住む所からは遠く離れているので、そう簡単に近くに「やって来る」わけにはいかないのだが、電話という現代の通信手段で、その空間に「やって来る」ことができたのである。その後しばらくの間お互いの経験談で話が盛り上がったために調査はいつもより長くかかってしまった。

＊　＊　＊　＊　＊

調査の前日までいろいろと準備をしても、計画通りにはいかないことも多々ある。調査中の突然の出来事から新たな可能性や質問を展開させるということができることもある。それらをもとにして次の調査の計画をたて新たな疑問に臨むのである。

（澤井　春美）

動物の声を、単語や文として、あるいは意味はなくてもその言語で用いられる音の組み合わせとして、聞き取ることがあります。日本語なら、前者の例としてウグイスの「ホーホケキョ（法華経）」やコノハズクの「ブッポウソウ（仏法僧）」など、後者の例としてニワトリの「コケコッコ」やネコの「ニャーニャー」などがそうです。

アイヌ語にもこうした「聞きなし」の表現がいろいろあります(とくに鳥の声は多くあります)。たいてい旋律や一定のリズムがついていて、それを唱えていくと、より「鳴き声」らしく聞こえるわけです。

地域によって異なりますが、鳴き声の表現そのものがその生き物を表す名詞になっているもの（下線部）があります。

1）カッコク　カッコク　kakkok　kakkok

2）トゥトゥッ　トゥトゥッ　tutut　tutut

3）チピヤク　チピヤク　cipiyak　cipiyak

4）ホ　ワ　ホ　ワ　ホ　ワオ　ワオ
ho　wa　ho　wa　ho　wao　wao

また、文になっているものもあったりします。

5）ヤキ　ヤキ　yaki yaki

6）クスウェプ　トイタ（クスウェプが畑をつくり）
kusuwep　toyta

フチ　ワッカ　タ（おばあさんが水を汲み）
huci　wakka　ta

カッケマッ　スケ（淑女が炊事し）
katkemat　suke

ポン　トノ　イペ（小殿様が食事した）
pon　tono　ipe

ポロ　トノ　イペ（大殿様が食事した）
poro　tono　ipe

7）ソ　ソ　ケイッカ　ソ　ケイッカ
so　so　k=eikka　so　k=eikka
（ほんとにほんとに私が盗んだ？）

ヘンパラ　マメ　タラ　ケイッカ
hempara　mame　tara　k=eikka
（いつ豆俵を私が盗んだ？）

最後の7）は繰り返しながらだんだん早口にしていきますと、ある鳥のさえずりらしく聞こえてきます。
（それぞれ何を指すかはページ右下に…）

（参考資料：日本放送協会編『アイヌ伝統音楽』『アイヌの音楽』、門別町郷土史研究会『沙流アイヌの歌謡』、知里真志保『知里真志保著作集2』）

平成8年度前半の主な動き

〔4月〕
- 共同研究「カムチャツカ半島民族芸能調査／コリヤクとアリュート」（ロシア／参加：谷本）

〔6月〕
- 幕別町蝦夷考古館文書資料調査（幕別町／協力：小川）

〔7月〕
- 平成8年度第1回運営協議会
- 共同研究「在ペテルスブルク博物館アイヌ資料の民族学的研究」（ロシア／参加：古原）
- ㈳ウタリ協会「アイヌ語指導者研修会」（長沼町／参加：澤井、貝澤）

〔8月〕
- 「バラートシ・アイヌコレクション」調査ほか（ハンガリーほか／谷本）
- 北海道自治研修所「市町村社会福祉事務研修」（江別市／講師：甲地）

今年度のセンター刊行物の予定

- アイヌ文化紹介小冊子『ポン　カンピソシ』第2集「よそおう（衣服）」（仮題）

昨年度から「世界の先住民の国際10年」関連事業として刊行を開始したアイヌ文化紹介小冊子ですが、アイヌ語をテーマにした第1集「イタク　はなす」に続き、今年度は衣服を取り上げます。

＊　＊　＊　＊　＊

このほか、次の刊行物を予定しています。
- 『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』第3号
- 『山田秀三文庫　音声・映像資料目録』
- 『アイヌ民族文化研究センターだより』第6号
- バラートシ・アイヌコレクション調査報告書（タイトル未定）

編集後記

◇山田秀三文庫音声・映像資料の目録刊行に向けての作業が続いています。調査に際しての録音内容などは、どのように見出しや索引を付けるのが適切か、どう配置するとよいか、など繰り返し考えながらの作業です。

◇問い合わせの電話にはいつも緊張します。研究員にとっては新たな学習や復習の貴重な機会となることもあります。また、センターからの回答を参考にしていただいた結果（書籍、記事など）をお送りいただくこともあります。この場を借りて感謝申し上げます。

「鳴き声」の答え
1）カッコウ　2）ツツドリ　3）シギ　4）アオバト
5）ヒバリ　6）ヤマバト　7）モミジ

編集・発行 北海道立アイヌ民族文化研究センター
〒060 北海道札幌市中央区北1条西7丁目　プレスト1・7 5F
Tel. 011-272-8801㈹　Fax. 011-272-8850
開館/月～金 9:00～17:00　休館/土・日・祝